園長先生の子育てひろば

令和８年１月

日々を更新する

園長　堀田あけみ

新しい年が始まりました。昔の日本では「数え年」といって、お正月にはみんな一緒に一歳ずつ歳をとっていました。クリスマスはありませんでしたから、今よりずっと、新年は特別な意味を持っていたのでしょう。

現代でも、帰省したり親戚が集まったり、特別な時間になります。楽しいようで、もしかしたら、小さいお子さんをお持ちの方には気の重い時間なのかもしれません。

世代の違う人の集まりに小さな子どもがいると、可愛い可愛いと言ってもらえる一方で、ちょっとしたことで、育て方や躾の問題に言及されることが多くなります。子育ての常識はかなりの頻度で更新されます。

例えば、完全に離乳することを、今は「卒乳」というのが一般的なようです。自然に離れていって、気がつくと飲まなくなっていることを「卒乳」、復職や体調等の都合で人為的に母乳育児をやめることを「断乳」と使い分けられています。かつてはすべて「断乳」と言っていました。自然に卒業するものではなく、断ち切るものだったんですね。時期も今より早かったと思います。現在アラサーの長男のときには、果汁を湯冷ましで割ったものを３ヶ月から与えていましたが、今は早くても５ヶ月、だいたい半年くらいで始めるもののようです。

次の世代に何か言いたくなるのは人の性で、子どもを育てている人を見ると、かつて子どもを育てていた人は、自分と違う部分を「進化」ではなく、「自己流の間違ったやり方」として批判したくなるものです。私達の世代だと、上の世代が「抱き癖」を忌み嫌っていました。子育て現役世代はご存知ない単語かもしれませんね。泣いた赤ちゃんを、すぐに抱っこすると堪え性がなくなるから、しばらく、もしくはずっと放置すると良い、と言われていました。よく泣く子の親は甘やして抱き癖をつけたと非難されたものです。大学生のとき祖父が亡くなりましたが、その葬儀で最中に泣き出した赤ちゃんがいました。「抱き癖がついとる！」と怒鳴りつける親戚のおばさんを、なにぶん、発達心理学を学び始めたばかりの学生でしたので、正論で説得しようとして、母と姉から注意を受けました。姉（元保育士）からは、「気持ちはわかるが場を弁えろ」、母からは「言ってもわからん人は受け流せ」と。

「抱っこしなくても泣かない強い子に育てる」のも「できるだけ早く大人と同じ食事をできるようになる」のも、「あなたのため」を謳った、「大人に都合の良い子の作り方」です。放置されて泣かなくなったとしたら、それは強くなったのからではなく、諦めたからです。上の世代から昔の話を持ち出されたら受け流しましょう。かつての私が他人が売られて喧嘩を買って出たのは、暇な大学生だったからです。忙しい大人は受け流すが吉で、そういう点では母は正しかったと思っています。現代の子育ては、便利で楽になったと言われますが、親に求められるものはどんどん大きくなっているので。

私自身も「老害」とならないよう、日々努めております。